『元の木阿弥』の人物造形　その1　―「花のお江戸」と「すりきり」と―

小原　亨

一

明暦三年の大火の後、江戸は復興期による経済発展を迎える。江戸城内外にあった大名屋敷の移転、城周辺の寺院の移転、主要道路の整備、いわゆる市街地の拡大と、寛文十年ごろまでに江戸は飛躍的な拡張と整備がすすめられる。浅草の北方、日本堤の先へと移転させられた遊里・新吉原も、経済活動と併せて活性化する。新しい享楽体現の場への関心は拡大していく。その一つの現れが、寛文期における遊女評判記の出版である。もちろん寛文期は仮名草子の出版事情も発展を遂げた。それまでは京・大坂が出版の中心地であったのが、江戸においても出版がなされるようになる。すでに承応期には江戸生え抜きの書肆・松会市郎兵衛が出版を始めている。万治期には鱗形屋三左衛門も創業した。寛文期になると江戸にも多くの書肆が存在し、いよいよ江戸板行の書籍が世に出ることになる。中でも大きな比重を占めたのが吉原評判記ではなかったか。野田壽雄氏(1)の著作によると、『吉原用文章』(寛文元年)・『吉原大全新鑑』(寛文五年)・『吉原根元記』(寛文六年)・『吉原袖かゞみ』(寛文六年か)・『吉原讃嘲記時之太鼓』(寛文七年、原本は寛文五年以前)・『吉原すゞめ』(寛文七年)・『吉原傾城双六』(寛文七年)・『吉原よぶこ鳥』(寛文八年)・『吉原こまざらい』(寛文十一年以前)・『ぬれぼとけ』(寛文十一年)・『吉原丸裸』(寛文十二年)・『吉原六方』(寛文十三年)・『吉原天秤』(寛文十三年)とある。これに『吉原しつゝい』(延宝二年)を合わせると、寛文元年～延宝二年の間、吉原評判記は毎年のように刊行されている。野田氏も言うように「雨後の筍のごとく」に遊女評判記類が出現している。いかに新興遊里・吉原への興味関心が高かったかが伺える数である。

さらに言えば、寛文期には江戸に取材した仮名草子作品も発行されるようになる。例えば浅井了意は『むさしあぶみ』(万治四年＝寛文元年)を刊行するが、実録風見聞記の読み物として明暦大火の様相を活写して、読者の関心を集めた。了意はまた『江戸名所記』(寛

文二年)も刊行する。これは『東海道名所記』の冒頭で少し展開した江戸名所見聞を広くとりあげ、江戸単体の見聞記としたものである。いずれも京の作者・浅井了意が、江戸の土産話として京の読者へ向けた江戸案内・時事紹介であった。特に『江戸名所記』は、四年前に出た中川喜雲の『京童』に対抗して「今度は江戸の名所記を出そうという野心もあった(2)」了意の意気込みもあろうが、なにより新興都市江戸が充実発展してきたことがこれら発刊の一因であろう。『むさしあぶみ』・『江戸名所記』の初版は京都の書肆から刊行されたが、慶安元年の酒戦を軍記物語風に脚色した『水鳥記』(寛文二年)は、松会板作品としてまず江戸で刊行された。その後に京都板が出されるという、それまでの仮名草子とは逆の経路を辿って東西二都にて発刊されることとなる。作者も酒戦の当人・池上幸広であるらしく(3)、ここにおいて仮名草子は、江戸の作者による、江戸の物語を、江戸の書肆が発行し、享受層を西に広げるという転換点を迎えることになる。そんな時代背景をもち、『ねごと草』(寛文二年刊)に続く同趣の物語『もとのもくあみ』が世に出る。

岸得蔵氏による考察(4)で延宝一〜二年の発刊とされた『もとのもくあみ』もまた、江戸の作者による、江戸の物語であり、発行も江戸版が最初であろうと考えられる。岸氏によると、遊女評判記『吉原袖かゞみ』と役者評判記『新野郎花垣』(延宝二年)の両書に依拠して成立したというが、これは堺町と吉原とを要素として導入したので当然のことであろう。上巻前半の木阿弥の道中記は、やはり先学諸氏も指摘するように、『竹斎』・『東海道名所記』などへの依存が見られる。例えば、定形ではあるが三河国・八橋での狂歌は、次のようにそっくりである。

かみ衣きつつやれにしつぎしあればはりめきれぬるたちおしぞ思ふ　(『東海道名所記』)

古紙子着つつ破れにしつましあればはるばるきぬるのりほしぞ思ふ　(『もとのもくあみ』)

また箱根山での「二里二里(にりにり)くだる箱根」の詞章も『東海道名所記』と相似のものである。あるいは「鳩の戒」としての主人公の設定にも『東海道名所記』との共通点がみえる。

これらに加えて『あづま物語』(寛永十九年刊)からの類似性も指摘したい。「あづまのかたハら」に住む「おのこ」が、「一生を、いたづらに、送らんことを悲しミ」江戸に出る構想が『あづま物語』である。「おのこ」は江戸の各名所を見て回るが、その中に特に分量は少ないものの「ねき町(禰宜町)」の歌舞伎小屋を見物する件があることに注目したい。その後「おのこ」は元吉原へ出て、「ゆゝしき上ろう」を見そめることになる。行き詰まった男の江戸出府、芝居町や傾城町との関与という構想が、『もとのもくあみ』に影響を与えた可能性は否定できない。

こうして先行文芸のそれぞれの要素を混淆しながら、再生を発起した男が、江戸の芝居町と遊里の、二大悪所場を舞台に欲望を充足しようとする庶民の夢物語が構想された。

二

『もとのもくあみ』冒頭にて、早くも主人公「もくあみ」は「すりきり」として登場する。

ちかきほどの事かとよ、都西山のあたりに、木阿弥といひしすりきり、世に捨てられて住むべき所もあらざれば……誠に貧家親知すくなければ、おのづから飢につかれ、飯もとめんもなければ…

実は『もとのもくあみ』においてはこの後、「飢につかれ」た木阿弥が「枕引きよせとろとろと眠りし」と、寝るしかないことが描かれる。最後は夢物語に終わることの「伏線」とも言うべきこの詞章は、次に江戸の繁昌と立身を目指す木阿弥の決意を導き出す。

枕引きよせとろとろと眠りしが、実にまこと、花のお江戸はつたへ聞く、唐の明州の津にも越え、西に長崎・博多の津、東は津軽外の浜、日本国の諸商人、かの地をめがけ寄り集まる、繁昌の所なれば、我も下りて鳩の戒、あんまとりにも身をやつし、諸大名へ近づきて、かせぐに追ひつく貧乏なし、立身せんと心ざし、住みなれたりしわら家をば、名残惜しげに立ち出づる。

「津軽外の浜」は謡曲『善知鳥』にも出る歌枕の地(5)であり、日本の東端と意識された地名であった。ここでは長崎・博多から津軽まで、つまり日本の西端から東端までという地理的概念として用いられてはいる。しかし、寛文十一～十二年、河村瑞賢による東廻り航路（この時期は仙台藩の南方・荒浜が北端ではあるが）・西廻り航路の開拓があったことを重ね合わせると、諸国の「津（港）」から江戸の津への物流も意識にあったのではないか。さらに言えば、参勤交代などでの人の流れもあったのだ。つまり、江戸は日本のあらゆる地域から物資と人が集まる、流通の集積地・消費地であることも作者の意識に上らないはずはなかろう。例えば延宝元年八月、日本橋本町一丁目に開業した三井越後屋の、その年の売上高は銀五〇貫目であったが、翌年には二六〇～二七〇貫目にも飛躍している(6)。こうした好景気に支えられて「繁昌の所」となった「花のお江戸」である。

この「花のお江戸」という詞章は、すでに『あづま物語』で用いられた江戸に対する美称であった。

くハんゑい十九ねんの、なつのころ、こきやうに、なこりつきせねと。おもひたつ田の、たびころも、あしにまかせて、ゆくほどに。むさしのくに、花のおゑどに。つきしかは。

『あづま物語』はこの後、上野寛永寺、江戸城に始まり、江戸各所を紹介する名所記の秩序に統括されるが、この作品において「花のお江戸」と言った場合、そうした新興都市の繁栄を視覚的に意味する語となる。『もとのもくあみ』の読者にとっても、華やかに賑わう江戸の風物景色が意識されたであろう。しかしまた、『もとの

もくあみ』における「花のお江戸」とは、視覚作用に加えて経済的な意味作用も含まれている。それは何より木阿弥の品川から芝への到着時の描写に現れている。

はや品川に着きぬれば、右手は海上まんまんとして、出る船入る船、櫓櫂楫をあらそひけり。芝口をたたきたて、牛馬に荷をばつけ出だし、おし合ひへし合ひ往還の、たよりもとむる都にて、聞きしにもまさり…まことにもろこし南京の、花の都と申すとも、いかでこれにはまさるべし。

海上に満ちる出入りの船には荷が満載されている。水揚げの後は、牛馬で出荷され江戸の各地で消費される。港のこの賑わいを描く作者は、「花の都」同様の意識で江戸という都市を見つめているのである。であるからこそ、木阿弥が「かせぐに追ひつく貧乏なし、立身せん」と思い立つのだ。さらに言えば、芝へ到着後の木阿弥はただちに芝明神に参詣・祈誓する。

それより神明のやしろにまゐり、「南無帰命頂礼御神は、現世富貴と守らんとの御ちかひとうけたまはる。我はいかなる宿世にや、すりきり人にすぐれたり。かならず現世富貴の身と守らせ給へ」とふしをがみ…

「すりきり」からの脱出祈願と言えばそうなのではあるが、ここにはそれ以上の現世的欲望への祈願すら感じられる。参詣の後、木阿弥は金六町にいる「よしみの人」を訪ねる。「人とふ事なし。誠に貧家親知すくな」かった木阿弥に、旧知の人が居るのは御都合主義的な登場ではあるが、このよしみの人こそ江戸見物の同伴者として設定される人物である。さらには木阿弥を悪所場へと誘い、「江戸一番のたいこもち」へ紹介する享楽情感への誘惑者となる。よしみの人とは、立身を願って江戸へ来た者の金銭を収奪する側に近接する存在であった。もっとも木阿弥は、東海道中、美濃国・今須において詠み散らす狂歌でこの人物の存在を仄めかしてもいた。

今須と聞けばたのもしく、木阿弥かくこそつらねける。

わがたのむ人はいますと聞くからに末たのもしき東路の旅

「わがたのむ人」とは、生き馬の目を抜くような江戸にすでに存在する頼り人＝金六町の「よしみの人」のことであったのかと読者が気づく。まるで伏線のような狂歌となるが、これを作者の意図とみるのはうがち過ぎというものだ。

さて、木阿弥はよしみの人に「我はこのたび大分金銀などもち来たり」と「大きにうそ」をつくのだが、ここは立身への欲望からくる虚栄心でしかない。ちなみに木阿弥は「ことに呉服など、あまたいたしてまゐりたり」とも言うのだが、ここも作者が三井越後屋を意識して配置した言葉ではないかと思うのは、これまたうがち過ぎであろうか。何はともあれ、こうして作者は欲望の坩堝たる江戸に、欲望の虜たる主人公を投げ込んでいく。

野田壽雄氏(7)は、『もとのもくあみ』が『竹斎』の系列の仮名草子であるとしながらも、これを系列の異端者として扱った。「堺町」や「吉原」の風景描写をとり入れた点を「新時代意識」として、早

くからこの作品の特異性を指摘している。また、主人公が「すりきり」のイメージを負うことについては、田中伸氏(8)も『竹斎』と同じとしている。しかし、竹斎と同じようなイメージを持つ御伽草子の人物「物臭太郎」に比べて、身分境遇の変化発展がない点に『物臭太郎』との違いをみており、「竹斎のイメージを受けて生まれた『ねごと草』も、『元の木阿弥』においても同様である」とする。「たわいのない笑いを標榜した作品」にとどまらない「模倣的作品とだけで処理しきれぬ、一つのパターンへの傾斜があるように考えられる」と述べて、仮名草子の史的発展に言及している。

「すりきり」を述べる場合、『浮世物語』巻一の一にも触れないわけにはいかない。

世に住めば、なにはにつけて善し悪しを見聞く事、みな面白く。一寸さきは闇なり、なんの糸瓜の皮、思ひ置きは腹の病、当座〳〵にやらして、月・雪・花・紅葉にうちむかひ、歌をうたひ酒のみ、浮きに浮いてなぐさみ、手前のすり切りも苦にならず、沈みいらぬこころだての、水に流るる瓢箪のごとくなる、これを浮世と名づくるなり。

谷脇理史氏(9)はこれを現実逃避の、浮世と関わる方法を提示するだけのものでしかないと批判的な見解を述べているが、今は『浮世物語』への評価は避けておく。ただ、「手前のすり切りも苦にならず…水に流るる瓢箪」とは、まさに木阿弥そのものである。江戸への道中における山王権現をめぐる挿話は、木阿弥に「舌三寸のさへづりに、五尺の身をやぶる」戯態を行わせたいがためであった。これは竹斎が狂歌によって浮世を批判的意識で捉える行為者であったこととも異なる。木阿弥はただ「浮きに浮いて」享楽情感に流される、主体性のない「ひやうきん」者でしかない。

【注記】

(1)『日本近世小説史　仮名草子編』(昭和六十一年二月　勉誠社)より抜粋した。

(2)野田壽雄氏「江戸名所記」(前掲(1))

(3)守随憲治氏「仮名草子に関する問題」(『国語と国文学』昭和三十二年十一月)

(4)岸得蔵氏『もとのもくあみ』の初版刊行年代について」(『仮名草子と西鶴』一九七四年六月　成文堂)

(5)『もとのもくあみ』頭注(『日本古典文学全集37　仮名草子集・浮世草子集』神保五彌・青山忠一・岸得蔵・谷脇理史・長谷川強校注・訳　小学館・昭和四十六年十月)

(6)林玲子「新旧商人の交代」(『日本の近世　第五巻　商人の活動』中央公論社・一九九二年三月)

(7)「仮名草子序説」(『近世小説史論考』塙書房・昭和三十六年一月)

(8)「仮名草子形成の地盤」(『仮名草子の研究』桜楓社・昭和四十九年六月)

(9)『浮世物語』解説(前掲(1))